

---

# コネクト。

朱璃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「ネクト。

### 【Zマーク】

Z0607Y

### 【作者名】

朱璃

### 【あらすじ】

幼なじみとの追いかけっこ中に事故ったオレ。次に目が覚めたのは、見覚えのない『日本』だった。確かに日本であるはずなのに、常識がまったく通用しない。それどころか、幼なじみからは「お前誰だ」と言われる始末。ここは一体なんなんだ!? オレ、帰れるんでしょうか。

今はいなくても

今日はばあちゃんの十二回忌だ。

ばあちゃんが亡くなった日、本当はオレも一緒に買い物に行く予定だった。だけど前の日に熱を出し、当日も外出ができる状態ではなかつた。熱に浮かれながらも相当な駄々をこねた覚えがある。

あの時一緒にていれば、ばあちゃんは車に轢かれなかつたかもしれない。幼いオレの歩調に合わせて歩いていれば、事故には合はないで済んだかもしれない。そう思ったことも一度や一度じゃない。

だけどそんなことを言つたら、散々叔父さんから怒られた上に泣かれてしまつた。母親を急に失つた叔父さんはもっと辛かつただろうに、幼かつたオレはそんなことを気遣つ余裕も無かつたんだ。

ばあちゃんはいつでも凛と立つていて、何があつても笑い飛ばしてしまつような人だつた。親父や叔父さんが弱気な時でも、痛いくらいこの力で背中を叩かれたらしい。じいちゃんはオレが産まれる前に亡くなつていて、その時もばあちゃんは弱つた様子を見せることもなく葬式の喪主を立派に勤めたらしいが、夜みんなが寝静まつた時に泣いていたのを見たと叔父さんが語つていた。

「上総——！」

階段から母ちゃんの怒鳴り声が響いて、オレは慌てて部屋を飛び出そうとした。

そして、違和感。

なんだろうと思つて部屋を見渡すと、いつもは大事に引き出しこしまつて『いのばあちゃんの形見が、机の上に出しつぱなしになつていた。

オレ出したつけ？

破損したり紛失したりしたら嫌なので持ち歩くことはなく、いつもはしまつたままにしてある。

首を傾げるが、十三回忌といつこと少し感傷的になつて出してしまつたのかとも思い、クッショニ性のある小振りな巾着に入った形見を手に取つた。しかし、引き出しにしまおうとして手を止める。オレは靈感があるわけでも勘のいい方でもないが、なぜか今日はこれを持つていつた方がいい気がしたのだ。

ばあちゃんもオレと一緒にいたいのかな、なんてらしくもないことを思いながら、教科書に潰されないよう一寧に鞄の奥にしまつた。

ぬひやんの一度田の怒号に急かせられて、オレはやつと部屋を飛び出した。

秋も終わり、冬に足を突っ込み始めたこの季節。身を切るような寒さの中、オレはチャリで疾走していた。

オレの目の前には、何の因果か幼稚園からずつと一緒だという腐り切った縁のある幼なじみ。こともあろうに、ちんたらと自転車を漕いでいたオレの頭を、スピードが乗ったまま後ろから勢い良く叩はたき去ってくれた。

「つまらタケー！」

白い息を吐きながら全力でペダルを漕ぐが、全く距離が縮まらない。というかむしろ離れてる…。なぜだ、同じスペックのママチャリであるはずなのに……。

オレ達が通う高校に行くには、街を一望できる大きな丘を越えなければならない。山というほど傾斜がキツイわけではないが、やはり自転車には辛い坂であることに間違いはない。

もう駄目だ、座つてんのに立ち眩みが起きてる、オレ。

荒くなつた呼吸のせいで、容赦無く冷たい空気が入り込んでくる。あいつ、学校着いたらウイリーして轢いてやると心に誓いながらも、どんどん減速していく。

遅れ始めたオレに気付いたのか、スピードを緩めないままタケが振り向いた。

「ヤダー、上総チャンたらギブアップ？」  
にんまりといやらしい笑いを浮かべてくるタケにかちんとして、力を振り絞ってスピードを上げた。

「「この口田つー変態くせえぞつー！」

「なんとでも言えばー」

息も絶え絶えなオレに対し、疲れた様子もないタケに戦慄する。

化け物かこいつ。

なんだかんだと悪態をついていたが、酸欠でもう駄目だと再びスピードを緩めようとしていたら、ついに待ち望んだ下りがやつてくる。反撃のチャンスとばかりに軽くなつたペダルを漕ぐが、まあ当然相手だって同じ条件なわけで。憎らしくらいにスイスイと坂を下つていくのが見える。

いい加減馬鹿らしくなつて、漕ぐのを止める。それでも下りのスピードに乗り始めた愛機は、冷たい風が耳に痛い程度には快調に走つてくれた。

もうすぐ学校に着くと思い、暢気に片手運転しながら鞄の中の携帯を取り出そうとしたオレの耳に、何かが擦れるような甲高い音が響いた。

振り向いた時にはもう、シルバーに鈍く光る車のボディが目の前に迫っていた。

甲高いスキール音が響き、健人たけとは急ブレーキを掛けながら振り向いた。

目に飛び込んできたのは、吸い込まれるように上総に突つ込んでいく車。驚いて自転車「」と転ぶ上総。そのまま車は、ガードレールにめり込んで停車した。

嘘だろ。

健人は自転車を道路に叩きつける。震える脚を叱咤しながら駆け出した。

申し訳ないと想いながらも運転手の安否は後回しにわせてもらい、ガードレールと車体の隙間に身体を捻じ込んで上総の無事を確認しようとした。よく見ると、上総の自転車がガードレールと車に挟まれてひしゃげていてぞっとする。

上総の姿を確認できずに車の下を覗き込んでみるが、そこにもいない。

ガードレールの外側は急斜面になつていて、まさかそこに落ちたのかと思い慌てて身を乗り出すが、そこにも上総がいる気配はない。どこにも血痕らしきものも無い。

何が起きているのか理解できずに後退ると、黒くタイヤの跡がついた地面に、上総の鞄が落ちていた。鞄からは中身が飛び出して散乱している。教科書に混じって和柄の綺麗な巾着から、手鏡が飛び出していた。

幼なじみである健人は、それが持ち出されるはずのない上総の祖母の形見だと知っていた。健人は顔を顰めて手鏡を怪訝に見つめる。

あれだけの事故にあつたにも関わらず、鏡は割れもせずに光を反射していた。

## ひたすら救いを待つばかり

暗いな。つーか痛え。当然か、事故ったわけだし。ヤダ、全身打撲かしら。

若干混乱気味でおねえ言葉が混じったことにも気付かず、恐らく寝転がつたままで辺りを見回す。完全な闇に放り出されている。

ああ、もしかしてここは地獄なのでしょうか。天国のばあちゃん、オレなんか悪いことしたつけ！？悪い幼なじみにそそのかされて小さな悪戯はちょっと……いやまあ多々したが、地獄の直行便に乗せられるほどの極悪非道な行為はしてないはずだ。

痛む身体に鞭打つて、なんとか両手を床について身体を起こした。よかつた、床はある。もしこれで手が宙を切つたら、地獄説がますます有力になってしまふところだつた。それか不思議な国に落下中説。少なくともオレには、ウサギを追い掛けた覚えも穴に落ちた覚えもない。

とりあえず身体が痛いといつことは、オレはまだ生きているのだろうか。

つーかさ、何これ放置プレイ？仮に地獄だとしても天国だしても誘拐……は無いか、特に金持ちでもないし。だとしても、迎えが来るのがセオリーつてもんだろ。怪我人を暗闇に放置つて人としてどうなのよ。いやまあ怪我してるかどうかは自分でも分からんだけども。

こうしても仕方ないと両腕に力を込めて立ち上がる。障害物が無いか確かめるために手を前方へ彷徨わせると、案外すぐ傍に棚

か何かが存在したらしく、派手に物を落としてしまった。よかつた。手を出してなかつたら激突するところだつた。

むやみに動かない方が得策かとは思つたが、ここにおいて必ずしも状況が変わるのは限らない。むしろこのまま迎えの気配も無く放置されて餓死するのは免れたい。

何度か方向転換してうろついていた、暗闇に一筋の光が射し込んだ。

もしかしてついに天国か極楽浄土からのお迎えが…？と思つたのも束の間。暗闇に慣れた目にはその光は少々きつかった。

ああああ何これまったく目に優しくないお出迎え。

反射的に手を細めていたオレの前に、影ができた。どうやら誰か立つてゐるらしい。人が立つてないと認識した瞬間、強く腕を掴まれた。

「貴様、ここで何をしている…？」

驚いて咄嗟に腕を振り払うと、相手はさらに強い力で掴み直してきた。

やべえ、「貴様」とか本氣で言つ奴いるんだとか呑気に思つてゐる場合じやなかつた！

慌てて説明しようとしたが、目が覚めたらここにいたんだから説明のしようがないことに気付く。

どうやら『誰か』は二人いたらしく、反対の腕も掴み上げられてしまつた。オレは囚われた宇宙人のような状態ですると光の方へ引き摺られる。ほんと優しさの欠片も無いね！バーアリンを見習え！

「うわあああ、すいませんごめんなさい勘弁してください。てかあんたらどうやら様で…？」

「黙つて歩け、こそ泥が」

こそ泥！？ こそ泥つて何！ 何も盗んでないですか！？

光が射していたのはドアだつたらしく、そこを抜けたとだだつ広い空間が広がっていた。出てすぐ目の前には、胸の位置までありそうなガラス張りの手摺り。吹き抜けになつているらしく、手摺りのすぐ下は大きく空間が開いている。大型の「パート」のような造りで、手摺りで囲まれた廊下の壁側には、いくつもドアが並んでいた。

引き摺られたままエレベーターに乗せられる。オレを捕えている謎の男Aが操作するボタンの数字を見て、ぎょっとする。

三桁！？ 三桁あるよ！？ 間違えてない、お兄さん？

どうりで階数分だけのボタンがないはずだ。見る限りあるのは、0から9の数字と、AからZのアルファベット。それでも十分多いけど。大体アルファベットは何に使うの。地下ならBがありやいいじゃん。

それにしても……。

オレは横目で謎の男AとBを見る。

彼らは無駄にでかくて軍人のような格好をしている。別に迷彩服を着ているわけじゃないけど。むしろ真っ黒な服だが、外国の映画に出てくるようなかつこいいデザインだ。

いかにもどこかの組織に所属しますつて雰囲気と黒ずくめのちよつとかつこいい服装により、オレの中での彼らの呼び名はオシャレショッカーに決定した。

しかし気まずい。

オシャレショッカー達はオレの腕を掴んだまま、私語の一つもしない。

ただでさえこんな状況じゃなくても他人と乗り合わせるエレベーターってのは気まずいもんなのに、なんだこの重い沈黙は。ここは一発ギャグを飛ばして場を盛り上げた方がいいのだろうか。いやいやいや、しつかりしろオレ。血迷うな。結果は見えてる。どうせ冷たい目で見られて「黙れ」とか言われるんだ。ああ、だけどだけど！耐え切れないんです！

何しろまだエレベーターの現在地は一桁の階だ。いくら普通のエレベーターよりもありえない速さで進んでいるとはいえ、一体ここからどれだけの時間を費やせば田舎地に辿り着くのか見当もつかない。

その時、救いのようにエレベーターが停止した。  
誰でもいいからこの状況を打破してくれと願つていると、開いたドアから姿を現したのは小学生くらいの幼い少女だった。

## 横道に逸れました

なんだこちびっこは。オシャレショッカーの仲間か?ちびっこギヤング?

「何をしている?」

謎の少女が口を開くと、オシャレショッカー達が畏まつて敬礼していった。

「水瀬博士、お疲れ様です」

博士?

よく見るとそのちびっこは、背丈に似合わない長い白衣を着ている。しかも口調が偉そう。この上下関係つてどうなつてんの。

数年後が楽しみになる綺麗な顔を顰めて、ちびっこはオシャレショッカーを見上げた。

「なんだソレは」

『ソレ』つてオレのことデスヨネ。すでにオレには人権も存在しないのか。

「はつ。第三倉庫で怪しい行動をしていたので捕獲しました」

「第三倉庫で?」

さらに眉間に皺を寄せると、ちびっこはオレを見上げる。

「お前、どうやって入った?軍に志願しに来たのか?」

「は?いやいやいや、オレ根性ないんで。自衛隊に入る気はまつた

く

思わず敬語を使つてしまつ。だつてオシャレショッカー達が睨んでる気がしたし。

「では無理矢理連れてこられて逃げ出したのだな

「いやだから

「恐れながら博士

「なんだ」

「第三倉庫には鍵が掛かった状態でした」

「だつたら尚更能力者である可能性が高いだろつ。空間移動か透過能力といったところか。なぜ確認に連れてこない」

「得体のしれない能力など危険です！しかも第三倉庫にいるなど！」  
「まあ厳重な処罰の対象にはなるだろうが。得体のしれないままに放置しておく方が危険だとなぜ分からない。もし予想が当たつているなら閉じ込めたところで無駄なだけだ」

ちびっこ博士サマの言葉に、オシャレショッカーがぐつと詰まる。

「この者は私が預からう」

ちょ、ペツトか何かと勘違いしてない？てゆーか処罰つて、オレ処罰されるんの！？

「着いてこい」

オシャレショッカーはまだ何か言いたげにしていたが、ちびっこ博士はそれを無視して隣のエレベーターに移動した。  
うわー、超睨まれてる。

不満げなオシャレショッカーを残し、オレはちびっこ博士に続いてエレベーターに乗り込んだ。

細い指が数字を入力するのを見ながら、オレはちびっこ博士に続いてエレベーターに乗り込んだ。

芻してみる。

能力者つて言つてたよなあ。何、ここでは普通に超能力とか使えちやう人がぞろぞろいんの？もしかして世間に隠れて怪しい実験とかしてる秘密結社？なんたつてショッカーだしなあ。なんとかライダー的なのも出てくんのかな。

ほんやりそんなことを考えていると、独特的の浮遊感が消えて、ありえない重力が掛かつてよろめいた。

なにい～！？横Gだと！？

明らかに先程とは違う位置に動いている。確かに順調に下つていたエレベーターが、右に移動しているのだ。さらに少し経つと、今度は前方に移動する。

目的の階数を表示する液晶を見ると、表示は4BGとなつていてもしかしてこのアルファベットは、横移動するための数字なのだろうか。

「私は水瀬紅。みなせべにお前の名はなんだ」

突然の自己紹介で紅と名乗ったちびっこは、先程のオシャレショッカーとは違い、一応オレの話を聞いてやろうという意志があるようだ。

「篠原上総。なあこ～こ～って一体…」

問い合わせる前に目的地に着いてしまったようだ。やけにスムーズに、ドアが音もなく開く。

「地下研究室だ。ここで今からお前の能力検査をする」

地下研究室とやらはワンフロアぶち抜きで造られているのか、学校の体育館何個分かというほど無駄に広かつた。天井も驚くほど高い。ドーム球場デスカ？

よく分からぬ機材が所狭しと置いてあって、あちこちで白衣の人間が忙しそうに動き回っている。子供は見当たらないので、やはり紅は特殊なパターンなのだろう。

「あ、博士お疲れ様です！先程の解析の結果が…って、誰ですかソレ

「また『ソレ』扱い。ちゃんと教育してよ、博士。

「被験者だ」

「被験者！？なんのですか！？」

「解析結果は後で確認する」

話し掛けてきた研究員らしき女は首を傾げたが、そんなことに構つていられないほどばかりに、忙しそうに仕事に戻つていった。

紅がずかずかと機械の合間に縫つて歩いていくのを見て、置いていかれないように慌てて追い掛ける。「うわーうわーとした中を器用に歩く様子を見ていると、昨日今日ここに来たわけではなさそうだ。何歳からこんなところにいるんだろう。」

オレはというと、少なくとも数えただけでも9回は機械や人にぶつかつた。その度にペコペコと謝りながら進んでいるので、いい加減腰が痛い。

やつと追い付いた先にあったのは、小さめのドアだ。どうやらワントフロアぶち抜いているわけではないようだ。もしかしたら研究室はこの階の一角だけなんこともありそうだ。どんだけ広いんだ。

ドアの横についているパネルに紅が数字を打ち込んで手をかざすと、シコン、と気持ち良くドアが開く。

さつきから思つていたが、今まで見た限り手動のドアが無い。オシャレショックカーに引き摺られている時に何か違和感を感じたが、そのせいだったことに気付いた。ドアというドアに取つ手が存在していなかつたのだ。停電したらどうするんだろう。

紅に続いて小さなドアをぐぐると、そこは理科室のような部屋になつていた。あちこちに使用目的の分からぬ装置が置いてある。奥の方にある机では、なんだか怪しい色をした液体がぼじぼじと気泡をたてているのが見える。うわー、いかにもな感じ。

「その椅子に座つてくれ。その辺の物には触るなよ。手が無くなつても知らないからな」

「何その予告！？爆発物でも置いてあんの！？」

オレは指示された椅子に大人しく座ると、さつさと中斷された質問を投げ掛けた。

「なー、こいつてほんとどこなワケ？特撮ヒーローもののセシトってわけじゃないんだろ？」

「お前、こいつがどこかも知らずに侵入したのか」

「だから、侵入したんじゃ……」

「王宮だ」

「…………はい？」

「お・う・きゅ・う」

…………」トニー寧にありがとう。

何これ異世界ファンタジー？つまりはそーゆーオチつてこと？なんか横文字のかっこいい国名が飛び出してくるわけ？でもよく考えたら田の前の少女は日本人っぽい名前だったわけで。あ、アジアンファンタジー？

「ちなみにこちらの国名は」

そう聞くと、はあ？と呆れた顔で溜め息を吐かれた。うう、小学生から馬鹿にされた。

「私はさつきから日本語を話しているつもりだが」

「まーオレも産まれてこの方日本語オンリーしか話せませんが」

「だったら日本以外のどこだと言つんだ」

「日本ですね」

「…………」

「…………」

「…………」

見つめ合つたまま停止したかと思つたら、またもや長い溜め息を吐かれる。うよつと、傷つくからやめてつてば。

どうやら王道なオチは期待できなさそうだった。

## 恐怖は人を饒舌にする

「どうやら紅は、若く身上で苦労性らしく。あ、この場合苦労させ  
てんのつてオレ?」

「とにかく、採血するわ」

「なんですか?」

「腕を出せ」

紅の手には、しっかりと注射器が握られている。

「ちょっと待つて。誰がやんの」

「私以外に誰がいる」

そんな自信満々に言い切られても…

「そういうのはきちんと看護免許または医師免許を持つてる人がや  
つてくれないと…」

どっちかと言ひつと綺麗な看護師さん希望だが、この際贅沢は言つ  
てられない。

「安心しろ。きちんと持つている」

「はい!?..」

いやいやいや、じんだけ飛び級したらその歳で医者になれるの?  
アナタ10歳くらいですよね?』

「医者つてこののはどのレベルの一?まさかまじないで病気治すと  
か言わないよね!?..」

「どこの原住民だ。大体それは医者じゃなく祈祷師じゃないのか  
オレ先端恐怖症なんですよ!..」

「さつきから注射器をガン見してゐるじゃないか

そりや恐怖ですよ!..

「往生際が悪いぞ」

紅は後退るオレの腕を捕まえて、ゴムのよつなものを巻き付けて  
血を採りやすくする。

「わあああああー。ちよ、堪忍してください。お代官様ー。」

「誰が悪代官だ。田をつぶつていればいいだろ。」

「悪代官とは言つてない。」

「ええええそんなこと言われても、」

「終わつたぞ」

「はつ？」

「だから、終わつた」

紅の手には、オレのものと思わしき血液が入つた注射器が握られていた。思わず目をつぶつたのは一瞬だったような気がするのだが、いつの間に採つたんだろ。」 それよりも、

「ぜんつぜん痛くなかった……」

「？痛かつたら医者である意味がないだろ。」

いや、当然のように言つけどね？ 免許あつてもがつたり痛みを与えてくれる人つてのは多々存在するわけでして。時には何度も失敗されて、針の跡が一ヶ所では済まないことだってあるわけで。

過去に学校で行われた血液検査を思い出す。

「すつげえ。わけわからん偉そうなクソガキだと思つてて『めん』

「……お前正直過ぎて腹立てる氣も無くすぞ」

紅は血液を別の試験管のよつなものに移すと、近くにあつた謎の装置にセットした。慣れた手つきで操作すると、オレの前に置いてある椅子に座る。

「そつこやむつきから聞きたいこともシッコ!! バリバリも満載なんだけどさ、検査つて何？」

「能力検査だ」

「いやだから、なんの能力？」

「そう言つと、珍獣でも見たかのような表情をされる。」

「お前……タイムスリップでもしてきたのか？」

「え、一般常識的なものなんですか、それ」

秘密結社が秘密バレてて大丈夫？

お前と話していると埒が明かないと失礼なことを呴き、紅はパソコンからしき機械を操作し始める。どうやら検査とやらが終わったようだ。

紅が何かのボタンを押すと、何も無かつたはずの空間に透き通った画面が何枚も浮かび上がる。どうこう仕組み、それ？

その空中モニターに紅が触ると、どんどん画面が変わつていつた。何枚も展開されたそれを、両手で器用に操作していく。

最後にパソコンを確認すると、紅は無表情の中に確かに驚愕を滲ませた。

「馬鹿な……そんなはずはない」

そしてオレを見ると、明らかに不審な目で睨み付けてきた。

「お前一体……何者だ？」

## 一体何者？

だから話を聞いてよ。人の話を聞かないお国柄なの？いや、日本でしたね。まあ自分でも何が何やらよく分かつていなかっため、聞きたいことの方が多いのは間違いない。

「あの……何が？」

「能力が出でいないだけならまだしも、感染していないなんてあり得ない」

「かんせんつ！？」

やだ、何その怖い単語。バイオなんとか的なことが知らないところで起きてたの？

「……本当に何も知らないのか」

「だから、なんの話をしてるわけ。オレは日本の国家機密に関わるような人間じゃないよ。怪しい裏組織の一般常識を話されても何も知らないワケ」

紅は色々と諦めて、腹を括つたようにパソコンを操作し出した。新しく現れた空中モニターの一枚に、世界地図が映し出される。「ここが日本であることは分かるな？お前が外国にいたというな話は別だ。恐らくそれはあり得ないとは思うが……」

そう言つて指差された日本は、オレが知つているものと若干違つていた。

「いや、日本は日本だし、形も見覚えのある地図だけど……なんでこれ反転されてんの？」

そう、モニターに表示されている地図は、オレが知つているものと左右逆になつていて。よく見ると周りの大陸も逆の場所にあつたので、反転されていいるとしか思えなかつた。

「これは日本政府で発行している正規の地図だ」「はあ！？ そんなはず……」

ない、と続けようとして気付いたことがある。さつき紅が展開したたくさんの中一見すると、文字が全て反転して鏡文字になっていた。

「何これっ。国家レベルでひねくれてんの？」

「は？」

「これもこれもこれも、ぜーんぶ反転されてる！」

「お前……自分の名前を書いてみる」

紙とペンを差し出される。

オレは渡された紙にガリガリと名前を綴った。

「名前くらい書けるつて」

渡された紙を見て、紅は無表情で言った。

「そうだな、見事な……鏡文字だ」

「はー？」

「器用だな」

「いや、今まで生きてきてずっとこの文字使ってたけど、不自由したことなんてないよー！」

オレよりもずっと頭の回転が速いらしい紅の方が、冷静になるのも早かつた。

……いや、分かつてたけどね。なんとなくこの子天才だよねとか分かつてたけどね。自分がちょっと情けないとか思わないでもないけどね！？ くそ、子供なら鼻垂らして野山を駆け回つてろよ。

「……やはり相互理解が必要なようだな。私から先にこの国のことを説明しようか？」

「お願いします……」

正直うまく話せる自信が無かったし、現状を把握することが優先だと思った。

紅は空中にモーターを開いて、さながら説明を始めた。

「まずはお前が聞いてきた能力の話だ。この国では13年前からあるウィルスが蔓延している。J-MAGI、一般にマギウィルスと呼ばれている。感染しても命に別状があるわけではないが、厄介な能力を発症するケースが出てきた」

ああ、それで能力検査。

「身体的に発達する者、魔法と呼ばれる力と似たものを扱う者。それぞれに獣眼、魔眼と呼ばれる。能力を使用する際に目の色が変わらるから、能力者かどうかはそれで判断するといい」

代つ子なんだから、もっと有効な判断方法を教えてくれ。というか主に回避方法を。

「日本にいれば一週間以内に必ず」のウイルスに感染する。能力の発症に関わらずだ。だからお前が感染していないうのは、異質なんだ」

「はーい先生。さつきも言ってたけど、オレが外国から来たんだつたらまだ感染してないって可能性があるんじゃないの?」

「さうへ―――！？」  
「その可能性は限りなく低い  
現在日本に鎌田中だからな」

無駄に技術は発達してゐるくせに、なんでそこで退行するのか。黒船が来るのが遅れたのか！？またかペリーの怠慢か。いいことないよ。サクッと開国しちゃいなよ。

「少し前までは他の国との交流もあつたんだが……発達した技術とマギウイルスが仇になつたな。日本は世界屈指の機械大国で、その技術を渡せと他国からの要求が激しかつた。その上謎のウイルスの存在。マギウイルスも他国にとつては無視できないものだったからな」

まあ命に別状が無い上に特殊な能力を手にできるとなれば、他の国にひとつでは脅威になる要素がたくさんあるだらうな。研究者や軍にしてみれば喉から手が出るほどほしいだらうし。

「しかも近年軍事大国であるアメリカから強い要請があつたこともあって、属国にされることを懸念した国王が鎮国を決定した。今は膠着状態だが、いつ戦争になるか分からぬ。そんな場合ではないというのに、能力者による内乱は激しくなるばかりだしな」

「戦争…………」

まさか平和ボケしたような国で育つたオレが、日本と呼ばれる場所で争いごとに巻き込まれるとほ。

紅の話によると、別に技術やウイルスを独占したいわけではないらしい。ただ、それを売つたり公開したりすると、悪用して結局戦争に発展する恐れがある国がいくつかあるという。それが日本に飛び火して、不利な立場になるのを避けたいわけだ。

そんなこんなで鎮国なんて対策を取つてしまつたために、攻め込んでくる国を警戒して軍は能力者を高い給与で雇う。能力者は感染者の一割に満たない程度だというので、高い能力を持つた人間は無理矢理連れてこられる場合もあるらしい。もちろん戦争のことも含め、国に反発する組織を制圧するためにも、常に能力者の募集をかけていいという。反国勢力というのは、いわゆるレジスタンスだな。しかもその組織には能力者が多く存在していて、なかなか抑えることができず、政府も頭を悩ませているとのこと。何より紅よりも幼い子供も所属しているらしい。

「あのや、JUN王領つてより要塞だよな？そもそもなんで国王が政治に口出すの？総理大臣は？」

「国の研究所や軍が混在しているから、要塞のようになるのは仕方

ない。重要な施設がまとまっていると色々と便利だからな。国王が国を納めるのは当然だろ。総理大臣というのは……宰相のようなものか？」

「……ごめん、質問変える。じゃあ天皇は？オレがいたとこでは国王つてのはいなくて天皇陛下がいたんだけど」

「天皇制度は300年も前に廃止されている」

「ええっ！？」

国王がいて天皇はいなくて、宰相がいて総理大臣がいない？でも天皇制度は確かにあつた。この違いはなんなんだろう。

「まあ、お前が知りたかったのはこれくらいか？他にも細かいことは気になつたところから聞いてくれ」

ソウデスネ。もうキャラシティオーバーだ。考えるの苦手なんだつて。

「さて、じゃあ自分の異質さを理解してもらつたところで、もう一度聞かせてもらおうか。お前は一体何者だ？」

ヤダ、ずっと無表情だった子が笑つてるわ。てか目が笑つてねえ。怖いヨー。確かに、確かにね？オレがまだ不審者であることには変わりないけどね？

ガリガリと頭を搔きながら、オレは椅子の上であぐらをかいだ。

## 夜明けはまだまだ

「お前の言う日本と、ここが違う場所であるのはもう分かってるな？」

ええ、非常に嘆かわしいことですが。

「ではまず、ここにきたきっかけと思わることを話せ」

きっかけと思われるのは、あの時の事故しかない。あのあと気がついたら暗闇について、オシャレショッカーに拘束されて紅に会ったわけだし。

うわ、オレこの国での歴史浅つ！笑っちゃつくらい浅い！ハハハ、楽しくなるね！

このありがちなきっかけとオレがいた『日本』をかいつまんて説明すると、紅は興味深そうに色々と質問を投げ掛けてきた。

「政治は主に、国民が選んだ人間がするのか。それは効率的だな」「いやー、案外そうでもないよ？自分達で選んでるわりには色々と不満も出てくるわけだ」

実際どう転ぶかなんて、行動してみないと分からぬものだ。人なんて簡単に変わってしまうこともある。

「それはさておき……こちらとどちらの日本を比較すると、微妙に似通つたところはあるようだな」

そうなのだ。名前は同じだが、成し遂げたことが違う偉人がいたり、日本人なら必ず知っている人物をお互い知らなかつたり。ちなみに地名などはほぼ同じだが、起こつた歴史などはまったく違う。坂本龍馬と中岡慎太郎が世紀の大悪党コンビだつたなんて聞いた時は、思わず心の中で「そんなはずないぜよ」と叫んでしまつた。ま

——「うちの日本の夜明けは遠そうですが、何しろ鎮国の真つ最中の  
ので。

「いつもと違うことをしたりしなかつたか」  
「いつもと違う……」

いつも通り健人からかわれて、いつも通りチャリで爆走して、  
いつも通り

「あーーーーーーーばあちゃんの鏡つ……」

「……うるさい」

「ああああああああ、オレがいた部屋に手鏡落ちてなかつた！？和  
柄の巾着に入ったこれまた和風の綺麗な鏡なんだけど」

「どうしよう、あんな派手に事故つたから割れてるかもしねり……」

「落ち着け。何か無くしたのなら、悪いが諦める。あの部屋は立入  
禁止だぞ」

「ええっ！？」

「そんなん！」

「第三倉庫は国王の私物を置く場所だ。通称『禁室』。よほどのこ  
とがない限り立ち入りは禁止されている」

「だからこそ泥扱いされたのか！」

鏡を持ち出したことが『いつもと違う行為』だつたことを告げる  
と、紅は一つの仮定を立てた。

「これは想像に過ぎないが……こことお前の世界は、パラレルワー  
ルドになっているんじゃないか？」

「……そりやまたファンタスティックね」

「私だつて信じられない。いくら技術が発達しているとはいって、時  
間や空間を超えることはありえない」

「魔法はアリなんですか。」

実際目にしたわけではないが、魔眼とこうのは魔法のよつなもの

だつて言つていたし。

「だがあ前の話を信じるなら、他に説明がつかない。同名の人物、同じ土地名。何より反転した文字と世界地図。もしかしたらその鏡を媒体として、一番繫がりやすい世界に来たんじゃないのか？」

「繫がりやすい？」

「パラレルワールドとは似て非なる世界。無限に広がつている。……と、言われている」

さすがの紅も最後は自信無さげだつた。

「もしそうだとすると、こちらの『篠原上総』はお前の世界に行っている可能性が高いな」

「うええ！？」

「同じ世界に同じ人間は存在できないだらう。もしかしたらドッペルゲンガーというのは、何かのきっかけでお前と同じ状況になつた者が作り出したものかもな」

「会つと死ぬつていうアレですか。だとしたらこっちのオレ、ぜひとも元の日本に飛ばされててくれ。お互い帰れるのが一番だけど。

「私はこちらの篠原上総を調べてみる。お前はあまり外に出ない方がいい」

「え、危険だから？」

「それもあるが、元の世界で親しかつた人物とはこちらの上総もなんらかの関係があるだらうからな。こちらでも坂本龍馬と中岡慎太郎は親しかつたと言つただろつ。もし知り合いに会つたとしても、向こうが知つているのは別の『上総』だからな」

「まあな……」

「どちらにせよ、一週間で帰れなければお前は感染する。もしこちらの上総が能力者ならば、お前もそうであるはずだ。身を守る術があるのなら、知つておいた方がいい。調べ終わるまで城に滞在している。禁室の立ち入り許可もどうにか打診してみる

初対面なのにあまりに親切な紅に感動する。

見た目は子供頭脳は大人な冷めたガキだと思つてたけど、なんだ  
かんだ言つても純粹な子供なのね！悪い人に騙されちゃダメ、絶対。  
「うう……お兄サンは猛烈に感動したよ。こんな話を信じてくれた  
上に、そんなに親切に……」

すると紅はにやりと笑つた。

「謎を解明するのは、科学者の仕事だからな」

訂正。純粹な親切心だけではなく、探求心からだつたようです。

## 生でもなく、死でもなく？

紅に案内された部屋は家具や電化製品が一通り揃つていて、暫く生活に困らなそうだった。見慣れた家電とは形が違うものがほとんどだったが、何に使用する物かはなんとなく分かる。

おまけに水道やトイレもしっかり完備されていて、部屋が無駄に白くて病院のようだということを抜かせば、ホテルの一室のようだつた。

「指紋、網膜認証の登録は今日中にしてやるから、暫く部屋から出るな。一回出たら認証するまで入れないぞ。それからこれは滞在許可証。これがあれば9階からこの階までは自由に行き来できる」「こここの階の数え方は少し特殊で、9階ということは普通でいう1階のこといらしかつた。地下が8階まであるので、下の方から順に数えていった数らしい。

ちなみに紅に連れられていつた研究所は4階から8階までぶち抜いて造つてあるらしい。だから天井が異様に高かつたのだ。  
もちろん研究所以外はきちんと一つずつの階として機能しているので、4階から8階は研究所を避けた構造になつてゐるらしい。

「りょーかい。大人しくしどきマース

紅から滞在許可証とやらを受け取り、部屋の鍵代わりとなる認証作業が終わるのを待つことにした。

……………トイレに行きたい。ああ、廁。便所。言い方は様々

なれど、とにかく用を足したい。

ベッドにだらしなく寝転がっていたオレは、勢いよく身体を起こした。

そして日本人の悲しい性か、オレは凡ミスを犯してしまった。

トイレは部屋の中にあったはずなのに！

そうそうホテルに泊まる経験なんて無かつたオレは、何も考えずに普通に部屋を出でてしまった。

眠かつたこともあつてぼーっとしていたせいだろう。はつと気付いた時には、すでにドアは完全に閉まっていた。

ああああ、なんたることだ。紅に連絡……いや、行けるのは9階までだ。紅のいる地下には入れない。

がつくりとうなだれていると、オシャレショッカーの制服が目に飛び込んできた。

おーの一！

先ほど手荒に扱われたせいですっかりトラウマになっていたオレは、思わず見つけた隙間にすばやく隠れる。

もう行つたかとこつそり覗き見たオシャレショッカーは、視線を感じたのか一瞬だけこっちを振り向いて去つていった。

「……………つ

一瞬見えた、その顔は。  
見間違えるはずがない。17年間、一緒だった。

「タケ……………

幼なじみの顔だった。

分かつてる、分かつてるんだ。自分に学習能力が無いことくらいつ！

オレは現在、幼なじみを追跡していた。

当然外にいるわけで。城を出ちゃったわけで。不穏な街の空気を感じ取つてゐるわけで。

うわ～！今だけオレをＫＹにしてください、神様！なんならＫＹ線も甘んじて受け入れます！

戦争といつものが身近なせいが、街はどこか殺伐としていた。空気が重苦しい。

荒れているどころか街は整然としているのに、コンクリートの建物が多いせいか、冷たく感じる。

思わずタケを追い掛けてしまつたが、これからどうすればいいのか。

城に戻るうにも、滞在許可証は置いてしまつたし、持つているからといって簡単には入れないだろ～。確か今度は入城許可証なるものが必要だつたはずだ。出るのは簡単、入るのは困難。

散々考えて、自分の脳ミソに絶望する。オレ、ザル過ぎる。

すっかり自分の思考に閉じこもつていたら、タケの姿を見失いそ

うになつて慌てて走る。

タケが曲がった角に思い切り飛び込むと、突然胸元を掴まれて近くの建物の壁に身体を押しつけられた。

「いつ……！」

痛みに顔を歪めると近距離から低い声が聞こえた。

「てめえ、誰だ。さつきから人のあとついてきやがつて」

聞き覚えのある声。

恐る恐る見上げると、確かに見慣れた幼なじみの顔がそこにはあつた。

だけど……。

オレを知らない……？

実に不本意だが、家族以外で一番近い人間といえばタケだつた。紅は確かに、親しい人間はどの世界でも繋がりがある可能性が高いと言つていた。

理屈はなんとなく分かる。例えば同じ両親からじやないと、オレは産まれてないわけで。そういうことを踏まえた上での可能性なんだろう。

「健人……だよな？」

まさか実は生き別れの双子の兄弟がいたとかそんなオチじやないよなー？

疑問符を付けて聞くと、タケは険しい顔を余計厳しくした。

「なんで人の名前知つてやがる」

よかつた。とりあえず双子説は消えた。

「いや、てゆーか上総だつて。かーずーむ」  
まさかこいつのオレは整形でもしてんのか?

「かずか……?」

嘘、名前言つても分かんないの? 分かられてもどづいたらいいかも考えてなかつたけど…いや知らないと言わるとシヨックだ。

「…………もしかして、篠原上総か」

なんだ、知つてんじやん! 距離にでもなつてたの?

「そう! やつと思ひ出して……つてええ! ?」

余計に襟元締め付けられました。

「お前、何企んでやがる」

「何言つて……」

「上総は死んだはずだ。13年前」

足元から崩れていくような気がした。

だつたらオレは、なんで生きてる?

自分に翻り当たられた研究室の一室で、紅はまぐるしく変わる画面を見つめていた。目的の情報を見つけると、手を止める。

「どうこいつことだ……?」

篠原上総。平成7年、12月12日死亡。

まるで何かを隠蔽するかのように、その情報以外はまったく載つていない。

紅は椅子に深く腰掛け、ただ画面を見つめた。

ふむ。どうやら。

「厄介なことに首を突っ込んだか……？」

## 「真実せざる」ある

「……死んだ?」

「マギウイルスの発見による混乱のせいで、能力者の「せりげに巻き込まれて死んだよ。あいつのばあちゃんも一緒にな」やつぱりばあちゃんはいないのか。

分かつてはいたものの少し落胆して、気になることを質問した。

「……親は」

「上総はばあちゃんと一緒に暮らしだった。親がいるなんて聞いたことない」

……そんな。じゃあ親父と母ちゃんは「せりげ」に行つたんだ。

「……なんでそんな」と聞く

「……いや……別に。悪い、勘違いだつたみたいだ。忘れてくれ」タケの手を解こうとするが、なかなか放してくれない。

「ちょ、悪かつたつて」

「ほんとに上総なのか?」

「は?」

「俺は幼かつたし、遺体を確認したわけじゃない。ほんとはあの時死んでなかつたのか?」

もしタケの疑問が真実なら、こいつのオレは何らかの理由で身を隠していたことになる。でも、なぜ?

しかしそれだって、予測の域を出ない。本当に死亡している可能性だつてあるのだ。

「お前どこから来たんだ。行く場所はあるのか」

「いや……まああるにはあるけど戻れないっていうか」

入城許可証持つてないし。

「ついてこい。『一ヒーラー』なら淹れてやる」

オレは少し笑ってしまった。こっちの世界でも、なんだかんだと悪態吐きつつお人好し。困った奴がいるとほつとけないんだ。

やつと手を放して歩き出したタケに続いて、建ち並ぶコンクリートの森を抜ける。

住んでいた場所とは違つて高い建物ばかりだ。

「な、じじじでどい？」

「はあ？」

「何県？あ、城があるってことは東京？」

「お前ほんとじつやつこじままで来たんだよ。京都だよ京都。首都も分かんねえのか」

京都。京都が首都だつたのは大分前だつたような気がするんですが。いや、大分なんて言葉じゃ足りないくらい前？

しかしこじまは恐らくパラレルワールド。何も突つ込むまい。

「いやー、どうやらオレ記憶喪失みたいでさ。名前しか覚えてないっぽい。お前のことも咄嗟に呼んじやつただけで、どーゆー知り合いだとか分かんないし」

みたいとかぼいとか非常に曖昧な表現をしてしまつたが、記憶喪失という設定で行こうと決めた。それならこじまでの常識を知らなくとも、ある程度誤魔化しがきくような気がする。

「記憶喪失とはまた違うような気がするんだが……」

「いや、絶対そうだつて。だつてオレなんにも知らないもん」

タケは腑に落ちない表情をしていたが、諦めたようにまた歩き出した。

「もうそろそろ着……」

タケがそう言い掛けた時、激しい爆発音が辺りに響き渡つた。

何！？ テロ！？

上がる悲鳴。何かが崩れる音。

何やら事件が起きた現場は、ここからそう遠くはなもそつだつた。

タケが舌打ちをして喧騒の方向に視線を走らせる。

釣られてそちらを見ると、薄暗くなつてきた空に黒煙が舞い上がりつていた。

「お前、ちょっとこの辺で隠れて待つてるー。」

「ええ！？ こんな場所で一人になるのはほんめん被りたいんですけどー。」

しかしオレの泣き言を聞く前に、すでにタケはそちらへ走り出してしまつていた。

「エエー……」

半泣きにもなりたくなるよね。

爆発から逃げ出してきたのであるう人々が、バタバタと走つてくる。

そして、再び爆発音。今度は連續で三度ほど音が聞こえた。  
「あーっはっはっはっ！ 善良な市民の皆さん、一軒に一ちわー！」

慌てて隠れる場所を探していると、少し離れた位置の建物の上から、高笑いが聞こえた。

5階ほどの高さの建物のてっぺんで、男がふんぞり返つて馬鹿笑いしている。あんなところに登つて怖くないんだろ？  
「あーっはっはっはっ！ 善良な市民の皆さん、一軒に一ちわー！」

行動もイッちやつてるよな。

角度で顔は見えないが、やけに細さが目立つ男だった。いかにも不健康そう。

「今からこの辺り一帯を爆発させまーす。じちやじちやしてて鬱陶しいもんね？綺麗に更地にしてあげます。あっちにもこっちにも仲間がいるから、運悪く巻き込まれちゃつたら」「めんねー？」

タケはどうやら、最初の爆発を起こしたこの男の仲間とやらの方へ向かつたようだ。

「恨むならHサマを恨んでね」

なんと。もしかしてレジスタンス軍とやらですか。

「はーい、れつしょーたーいむ」

頭の悪そうな発音と共に男が手を叩くと、立て続けに周囲の建物が崩れ落ちた。

あちこちで悲鳴が上がる。逃げ惑う人々は、パニックになつているせいで余計効率悪く避難していた。

というかこれは、非常にヤバイ状況では。

銃刀法なんていう法律がある平和な国で過ごしたオレは、実に非力だ。ましてや爆発事件なんて。

そして何より、これは爆弾を使用しているのか、噂の能力者とやらなのか。まあどちらにしても死亡フラグに変わりはないけどね！

男が更に手を叩く。

爆発音。

かなり近い

！？

ガラガラと建物が崩れる音が間近で聞こえ、何かがメリメリと剥がされるような音が つて、ええ！！

頭上に影がかかったと思つたら、すぐ近くの建物の壁が剥がれて倒れてきていた。

身体が硬直して動けない。

そのままへたりこんでしまうと、なんと倒れてきていた壁がぴたつと不自然に止まつた。 はい？

傾いたまま停止している壁を伝つて建物の根元を見ると、恐らく紅よりも2、3歳は年下のように見える幼い少女が、壁を押さえていた。

えーっと何これ幻？ どんだけ怪力？

少女は完全にひっぺがされた壁を持ち上げると、軽々ぽいっと投げ捨てた。

そしてこつちを見てこいつとあどけなく笑うその顔は 目が真っ赤に染まつっていた。

上総に割り当てた部屋に向かっていた紅は、騒々しさに足を止めた。

慌ただしく走り去るのとする軍人を一人呼び止める。

「おい、何があつた」

「能力者による爆破事件が起こつたようです。怪我人も多数いるようでした、今通報がありました」

「……そつか。分かつた」

紅が行つていいぞ、と声を掛けると一礼して走り去つていく。

(最近多い)

能力者による破壊行動が頻繁になつてきている。

恐らくレジスタンスによるものではないだろう。レジスタンス軍は一般市民を巻き込むことはしない。

レジスタンスによるものならば、目的は国への訴えだとはつきりしているが、こうも無差別だと見当もつかない。ただの遊びか、何か目的があるのか……。

何はともあれただの研究者である紅にできることはない。エレベーターに乗り込み、目的の階へと急ぐ。

上総の部屋の前で足を止めると、室内に連絡を取るためにボタンを押した。

「水瀬だ。認証が終わつたぞ」

暫く待つが、返事がない。

「……開けるぞ?」

寝ているのかと思い、持つてきていた小型の機械に長々としたパスワードを打ち込んでいくと、ドアが開いた。

紅の目に飛び込んできたのは、ほとんど使われた形跡の無い無人の部屋だった。

## 迷子は動くべからず

ちよちよちよ、お嬢さん、目が尋常じやないくらい充血していますよ！？もしかして目の色が変わつて、白目のこと…？先に言つておいてください、紅さん。

現在オレは、びっくり仰天怪力少女と対峙していた。  
あどけない顔で微笑んでいるはずなのだが、いかんせん白目が真っ赤で怖すぎる。明らかに敵キャラの風貌だ。

オレが固まつていると、少女の瞳は徐々に赤みが治まつて白を取り戻していた。

近寄つてきてオレの手を引くと、立つよに促してきた。  
「ここ危ないよ。ナナ、安全な場所知つてるから一緒に行こ。」「どうやらナナといつらじい少女は、安全な場所に案内してくれるらしく。

だが、オレは躊躇つた。タケに動くなと言われているし、いくら子供とはいえ見知らぬ土地で知らない人についていくのどうかと思うし。

その時、再び「ぐ近くで爆発音がする。  
そしてオレは、恐怖に負けました。

「お願いシマース……」

裏道らしき場所をくねくねと抜けてナナに案内された場所は、ひつそりと佇む一般的な民家だった。

民家と言つてもこいつの基準であり、見慣れたものと違つてやはり主な素材がコンクリートでできているらしく、あまり温かみは無い。

ナナは少し厚めの透明ペンクのプラ板のよつたペンダントを服の下から取り出す。う？ほどの大きさだらうか。子供用のおしゃれに作られたような可愛らしこそペンダントは、ハートを型取つていた。

そのペンダントヘッドをドア横の黒くてツルツルした機械にかざすと、ピッと電子音がしてドアが簡単に開く。そのまま躊躇いもせずに、ナナはオレの手を引いて中へと入つて行く。

「えーと、ここはナナちゃんの家？」

「うーんと……みんなの家」

じてんと首を傾げる様子が可愛らしい。あんな馬鹿力を發揮するとはとても思えない。

みんなの家とまじりつてだらう。これとこいつ時の避難所といふことだらうか。

コレングに通されるのかと思つて、そのまま寝室まで引つ張つて行かれる。

「えーとなぜ寝室……」

無機質に置いてあるベッドは、使用された形跡が無い。

ナナはなぜかクローゼットを漁りだした。たくさんの服を搔き分けて、下に置いてある物も退かしていく。

何かを発見したようで、ナナはぴたつと手を止めた。

不思議に思つて覗き込むと、クローゼットの中の床には不自然に切れ目が入つてゐる部分があつた。何かを差し込むような深い溝もある。

ナナが再びペンダントを取り出し溝に差し込むと、床の切れ目が横にスライドした。一人が通れるくらいの穴が開き、中は階段になつてゐるのが見える。

「ここを降りるの」

先にナナが階段を降りていくのを見守つて、多少躊躇いつつも後に続いた。

2階分程度の距離の細い階段を降りると、一つのドアに辿り着いた。

「ここで再びペンダント登場。大活躍だな。」

今度はかざすだけのようで、ここに繋がる家の入り口と同じような機械が設置されている。

ドアが開くと、エレベーターだった。

王宮とは違い、このエレベーターは無駄にボタンが多くはなかつた。ナナがボタンを押すと、程なくして下降を始める。

エレベーターが停止してドアが開くと、薄暗い廊下が現れた。

「パパ！」

「は？ パパ？」

目が慣れなくてよく見えなかつたが、どうやら人がいるようだ。それも結構人數がいる。

その内の一人に、ナナは走り寄つていった。

「ナナ、偉いね。ちゃんとお使いできたんだ」  
ナナの父親らしき人物は優しくナナを抱き上げる。  
そしてオレの方に視線を移してくる。

「こんにちは」

「……こんにちは」

一見優しく『見える』笑顔。だけど目が笑ってない。  
あーふりぱり嫌な予感。もう嫌な予感しかしないよ。

目の前の人間の白目が青白く光つた気がするが、確認する前にオレの意識は闇に落ちた。

## 裏切りとも言えない

なぜこいつなる。

現在オレは、分厚いガラスで覆われた部屋に閉じ込められています。

ああああもうっ！ 目が覚めたらなんてパターンはもうこらねえんだよ！

ガラスの向こうには数人のおっさんと、私服に着替えたらしいタケがいる。

「おはよう。気分はどうかな？」

部屋に設置されたスピーカーから、ナナの父親とかいう男の声が聞こえる。

「いやーまあいいワケはないですよね」

べつ。

多少やさぐれながら答えると、ナナの父親は苦笑した。

「悪いね。我々の不利になると思われる人間を野放しにするわけにはいかないんでね」

なんでオレがこいつらの不利になるんだ？

「……おい、偽物」

タケが口を開く。

「はあ？ 偽物？」

「なんのつもりか知らないが、上総のふりをして近づいてきたんだ。目的を話すまではそこで過ごしてもらつ」

……つまりオレは信用されてなかつたわけだ。

「つーか何、お前の上司とかの指示なわけ？仕事熱心ねー、軍人サントのは。なんて言うか、政府の犬？」

「あんな奴らと一緒にすんじゃねえ」

「……だつてお前軍の人間じゃないの」

「……潜入捜査だ。俺は本来レジスタンス軍の人間だからな」

「へー。子供を危険人物のお迎えに寄越すような奴らより、お前がお嫌いな役人さん達のがよっぽどまともだね。レジスタンスなんてかつこいいこと言って、自己満足のテロリストだ」

「てめえ……」

「この際オレが裏切られたことは置いておこう。死んだと思つてた奴がいきなり現れたら、誰だつて簡単には納得できないし。それは裏切りとさえ言えないのかも知れない。だけど、子供を危険な目に合わせる」とは理解しがたい。

「……自分の立場が分かっているかな。不用意なことは言わないことだ」

ナナの父親が忠告していく。

「今後のこととは話し合つて決める。悪いけど、暫くそこにいてもらうよ。食事なんかは用意するから心配しなくていい」

タケはもう何も言わなかつた。

人がいなくなつたところで、ようやくオレは一息吐いた。そして自分の行動にしみじみ後悔する。

なんだかんだで城でも不審人物だつたわけだし、いきなりいなく

なつて紅に迷惑をかけてしまつただろつか。  
てゆーか。

「むつかつく……」

誰もいのをいいことに大声で叫んでやる。

何、タケのあの態度！？元の世界のタケが可愛く見えるね！つん  
けんしちやつてさ、ヤな感じ。

心の中で散々悪態をついていると、ガラスの向いのドアが開いてナナが入ってきた。ナナと同じ歳くらいの見知らぬ少年も一緒に。

口をパクパクさせてこっちに何か言つているようなのだが、当然スピーカーを通していないので聞こえない。

しゅんとうなだれるナナを通り越して、少年がガラスに手をついた。少年の白目が青白く変化する。能力者か。

何をしているのか分からずにぼんやり見ていると、少年の目が元に戻る。ガラスから離れると、今度はナナがガラスに手をついて横に引っ張つた。最初に見た時のように白目が真っ赤に染まる。んー、いつ見てもちよつと怖い。

音も無く分厚いガラスが開いた。

「え

「お兄ちゃん！」

ナナが飛び付いてきた。

「ナナ？何これなん……つーか勝手に開けていいのか！？怒られるんじや……」

いや、オレ的には非常に助かりますけども。

「あの、ごめんなさい……。ナナはお兄ちゃんが仲間になるんだと  
ばっかり思つて……」

なんていい子なんだ！罪悪感を感じてわざわざ助けにきてくれた

のか。

「あのね、あの子は陸りくつていうの。鍵開けの能力者だよ。お兄ちゃんのこと助けたいって言つたら協力してくれた！」

「そつか。ありがとな、ナナ、陸」

礼を言つとナナはえへへと可愛らしく笑い、陸は「くじと頷いた。む、無口な子だな。

「つーか、見張りとかいたんじゃないか？…どうやつて入つてきたんだ」

まさか不審者を見張り無しで放置なんてしないだろう。

「あのね、お姉ちゃんがなんとかしてくれたの！監視モニターもお姉ちゃんがいじつてくれた！」

お姉ちゃん？まだ協力者がいるのか。

その時カツン、と靴音が響き、誰かが部屋に入ってきた。

そちらを向くと、オレと同じ歳くらいの美少女が……って。

「水瀬碧瑠みなせ へきるー？」

そこにはいたのは、元の世界で同級生だった水瀬碧瑠だった。

同級生と言つても、水瀬とはほとんど関わりが無い。せいぜい課題提出で言葉を交わす程度だ。

水瀬は人当たりがよく、容姿もいいのでよくモテた。少しくらいやつかみを買いそうなものだが、可愛い系にも関わらず性格がサバサバしているせいか、女子の受けもいい……はずだったのだが。

「どこかで会つたかしら」

「無表情！そして声に抑揚が無さ過ぎる！」

「いやあの……気のせいでした」

「ふーん……」

オレの顔を見ながら思い出すとしなくていいから！顔面！顔面にもつと使い使って！

おかしい。水瀬はいつもにこにこしていたはずだが。てゆーかこの無表情、紅よりもヒド……ん？よく考えたら、『水瀬』？しかもよくよく考えれば、顔も似てる気がする。

「……もしかして妹とかいる？」

「いるけど。すごく可愛いのが一人。今は城で働いてるわシ……シスコンか。

「妹は『国』側で、姉は『反国』側なんだ？」

「あの子のこと知ってるのね」

「え……と、まあね」

「まああの子は有名だしね。私も元は城で働いてた。色々理由があるのよ」

まーその辺は突つ込まないでおくのが大人つてもんだよね。てゆーか有名人なのか、紅。タダ者ではないと思ってはいたが。

「と、いうか、やつたとそこから出でてくれない？ずっと居たいなら別

「こいけど」

三食毎寝付きを手放すのは中々おしい……じゃなかつた。

「出ます出ます！」

ナナの手を引いて慌ててガラスの間を通り抜ける。

「陸ちゃん、ありがと！」

「どういたしまして」

笑顔で礼を言うナナに対し、陸は無表情で答える。つーかこの国無表情率高くなえ？

「ついてきて」

水瀬はさつさと踵を返すと、足早に歩き始めた。

忌まわしきガラス張りの牢獄がある部屋を抜けると、長い廊下が広がっていた。

「なあ、なんで助けてくれんの？」

「説明はあと。めんどくさいから」

ちよ、最後のそれ言う必要ありました！？めんどくさいって言ったよこの人！思いつきりへ口ましてダメージを『えようつて手か！？

長い廊下を右や左にひたすら曲がり、途中エレベーターに乗つたりして目的地を目指す。なんかオレここに来てから異様にエレベーターに乗つてる気がする。高い建物が多いから仕方ないのか？いや、気を失つてる間に移動してなければ、普通に考えてここ地下だよな。どんだけ穴掘つた。

水瀬が立ち止まる。どうやらここが終着点のようだ。

水瀬はナナが持っていたようなプラ板を取り出す。ナナの物よりも大きめで、形は長方形でカードのようだったが、同じような役割をすることが伺える。ドア脇に付いている装置にスライドさせる

と、シユン、と気持ち良くドアが開いた。

「入つて」

水瀬に続いて部屋に入ると、後ろから跳ねるよつてピョウ「ヒュウヒュウ」ついてきていたナナと、ナナの後ろを静かに歩いていた陸も一緒に入つてくる。

その部屋は、様々な機材やモニターで溢れていた。モニターにはあちこちの部屋や廊下の映像が映し出されている。どこかの街の風景も映つていた。

その辺にあつた椅子に全員座らせると、水瀬は機械の前に向き直る。ものすごい速さでキーボードを打ち出した。

「ここに指置いて」

言われるままに小さな箱のよつた機械に指を置く。

水瀬がさらにキーボードを打ち込んでいくと、あちこちにある機械の一つからカードが吐き出された。よく見ると、先程水瀬が使つていたプラ板と似た物のようだ。

それを取り出すと、水瀬はオレに差し出した。

「これあげる。これが無いとここでの生活は厳しいから」「これなんなわけ？」

「鍵や身分証明の役割をしてる。指紋登録してるから、本人以外が触つても機能しないわ。これで人を認識するから、各個人で入れる場所や入れない場所がきつちり分けられる。例えば、この部屋は私と他数名の限られた者のカードでしか開かない。ナナや陸のカードではエラーが出るの。ちなみにこれはパーソナルカード、一般的にPカードって呼ばれてる。無くさないでよ」

「もちろん。個人情報流出禁止ですよねー」

「本人の指紋以外では機能しないって言つたでしょ。高いのよ、それ」

「H……ち、ちなみにおりくらで」

「聞きたい？」

「イイイイエ。聞きたくないです」

何しろオレは現在無一文だ。しかも水瀬の言い方だと、財布を持つても、へそくり出しても全然足りなさそう。それ以前に、恐らく金銭の類も鏡文字になつている可能性が高いから、使用不可能。どちらにしろオレには、人から『えられた物に文句をつける権利は無い。

「もつと小型で、加工してアクセサリーにできるタイプもあるんだけど、そつちはもつと高いわね」

「ナナのは？」

「あれは普通タイプの物を加工してあるの。無くすよりはいって同じようにしてる人も結構いるけど、ある程度の面積は残しておかなきやいけないし、曲げたりもできないからちょっと大人向きではないでしょ」

なるほど。水瀬の物より少し小さく見えたのは、加工したからか。たぶんハートは横幅で面積をとっているから、比べたら対して変わらない大きさになるんだろう。

「水瀬はどうしてんの？」

「チヨーンつけて服のどこかにぶら下げる」

ほら、と服を捲つて見せてくれるが、やめてくれ。一応健全な青少年だから。

「ナナもナナも～！見て見て、可愛い？」

ナナがペンダント型のPカードを掲げるよつに見せてくる。

「可愛い可愛い」

頭を撫でてやると、ナナは嬉しそうに笑つた。

「んなに可愛いのに怪力、……。

しかしオレが水瀬の説明を受けている間、子供達は妙に静かだつた。わきまえる場所はしつかりわきまえてるつていうか、その歳にして悟り過ぎだろ。なんだかホロリと泣けてくる。陸はいるんだかいないんだか分かんないくらい存在感消してるし。

「り……」

ついつい構いたくなつて陸に話し掛けようとしたら、こきなつてアが開いた。

「碧瑠！」

タケが血相変えて飛び込んできた。

「お前どいつももりだ！？」「いつを勝手に出すなんて！」

「別に。説明も無しに誘拐して閉じ込めるなんてやり方が気に入らなかつただけ」

「……それは俺達を裏切ると見なしていいのか」

「好きにしたら」

「お前自分の立場を考えんのか！これで更に反感買つぞー。」

「始めから対して信用なんてされてない。國お抱えのエンジニアだつた私がここに来た時から、ずっと」

「碧瑠！」

え、ちょ、何。修羅場？いや、明らかにオレにも原因があると思われるんだけど。しかしエンジニアだなんて、姉妹揃つて頭がいい。しかもその歳で。

「……今すぐこいつを戻せ」

「予測だけで人権を無視するの？彼は何も知らないかもしねの

に、そんなのフエアじゃない。彼には不自由じゃない生活をするだけの権利があるわ」

「……勝手にしろー」

タケはオレを射殺しそうな目で睨んでから、イライラと部屋を出ていった。

……なんとなく分かつてしまつた。あいつ、水瀬のこと好きだろ。タケは気を許している相手にほど、心配な時は熱くなる。ただの勘だけど、どっちのタケも本質は変わらない気がする。

「お姉ちゃん……」

ナナがオロオロと口を開く。陸の手をぎゅっと握り、心配そうに水瀬を見ている。

「大丈夫よ」

「ごめんなさい……」

俯くナナの頭を撫でて、水瀬はこっちに向き直る。

「疑問がたくさん?」

「まあ正直。でもオレが聞いてもしうがないことだと思つし、聞いてなんとなることでもないような気がするし。それに水瀬も、疑問がたくさんあるくせに何も聞いてこないじゃん」

「お互い様つてことね」

「そうそう。『フエアじゃない』のは嫌いなんだろ?」

「そうね」

お、ちょっと笑つた? 口角が微妙に上がつただけだけど、初めて柔らかい表情を見た気がする。

しかし、孤立しても信念を貫くとは、武士よのう。いい女になるよ、絶対。タケの奴うかうかしてらんないな。

「ああ、じゃあ行きましょうか」

突然水瀬が立ち上がり、ナナと陸も椅子から飛び降りる。

「え、どこに？」

「住む場所が必要でしょ」

今までいた建物を出ると、そこには意外な光景が広がっていた。

「……何これ」

眼前にあるのは、オレが見てきたこっちの街の風景とは似ても似つかない、活気のある街。あちこちで明るい声が聞こえ、笑い合う人々が見える。点在する飲食店からは、美味しいそうな臭いが漂ってきていた。

しかしこれだけなら、まあどつか元気な街に移動してきたんだな、と思う。しかし不自然な点は、この街には天井があるということだ。ナナと陸は、すでに飲食店の一つに走つていって試食品をもらっている。

オレが呆然としていると、水瀬が言った。

「よつじゅ。レジスタンス基地、地下街『帳』へ」

## 番外編・すいへいりーベ（前書き）

今回はちょっと番外編を挟ませていただきます。本編の説明の多さに絶望したので…。お、上総とタケしか出ません。

タケは昔から、『理科』が好きだった。

小学生の理科でやつた炎色反応は特に好きだったようで、田を輝かせて火を眺めていた。

オレもその不思議な色に変化する炎が好きだったから、一人でこつそり理科室から材料を持ち出した。

特別な空間の中で秘密の実験つてのがスペースになつたのか、秘密基地で見る炎は特に綺麗だつた。赤に、青に、紫に、緑に。様々な姿を見せる中でも、特にオレ達のお気に入りは青だつた。

そういうえば出会つた頃から、タケにはひどい悪戯に付き合わされたものだ。

おかげで俺達は、『近所でも有名な悪ガキコンビ』とのし上がつていた。

幼稚園の頃、犬小屋に名前が書いていないので、虫眼鏡で名前を焼き付けようということになつた。一人で必死に太陽光を集めだが、夢中になつて小火<sup>ほや</sup>騒ぎを起こした。

思えばこれが、オレとタケの悪ガキ時代の始まりだったような気がする。

自転車に自作の巨大なプロペラと羽をつけて飛ぼうとしたこともあるし、傘を広げて木の上から飛び降りたこともある。どちらも見事に骨折した。

揃つてギブスをして学校に行つたら、またやらかしたが、という感じであまり驚かれはしなかつた。

死海というものを知つたタケがお年玉をはたいて大量に買つてき

た塙を、一人で風呂にぶちこんで実験している途中親に見つかり、こつぴどく怒られたこともあつたな。

まあとにかく、あいつところどころくなことがなかつた。

「何見てんだよ」

「いや、別に」

やつぱりこっちのタケの態度は刺々しい。もうオレが帳に滞在してから5日は経つのだから、少しきらいにビビりにかならないものなか。

なぜか水瀬に無理矢理一人きりにされ、こつして気まずい時間を過ごしている。タケは終始不機嫌そうだ。

タケは仕事をしているのか、手元にあつた書類を読み終わると舌打ちをした。

そしてタケの白田が青白く変化し、一瞬の内に書類が燃え上がつた。

「……お前能力者だつたの」

「お前に答える義務はない」

かつわいくないなー。でも。

「やつぱり炎、か」

「あ?」

「べつにこー？」

タケの手から発生した炎は、あの日秘密基地で一緒に見たような、綺麗な青をしていた。

そういえば、と思う。

そういえば勉強の苦手なオレも、元素記号だけはタケに仕込まれて完璧に覚えている。水兵リーベ僕の船とかいう、子供心にも無理矢理なこじつけっぽい覚え方だと思ったもんだけ。

あいつの存在も多少役には立つてることか。少なくとも何度も赤点を逃れたことはある。

じつと見つめるオレに、タケは最高に嫌そうな顔をした。

「だから、なんなんだ！言いたいことがあるならはつきり言え」

「いや、なんだかんだでオレを自由にしてるから。お人好しだなーつて思つて」

「それは俺の意思じゃない！」

はいはい、水瀬のためなのね。

必死で反論するタケの言葉を聞き流して、昔何度も反芻した言葉をもう一度思い出した。

水兵リーベ、僕の船。

秘密基地で何度も繰り返した暗号のような言葉。

場所は違えど『秘密基地』で、オレはまたあの日と同じ青い炎を眺めている。

いつか帰れる時が来たら、またタケを誘つて少しくらい馬鹿をやるものいいと思った。

## 喧騒に飛び込む

賑やかな地下街の中には、和やかに笑い合つ異国の人間も混じつていた。

「ええつ！？ 何ここ地下なの！？ てゆーか外人サンがいるー鎖国はどこいつた！？」

「日本にいた他国民全員帰せるわけないじゃない。能力が出てしまつた人間もいるし。土地ウイルスだから、能力者以外は帰国できた人間も多いけど」

人質の役割も果たしてゐるのかな。ヤな国になつたねー。

「土地ウイルスって？」

「その土地にいないと感染しないってこと。だから海で区切られる北海道や沖縄は、わりと感染度が低かつたわ」

水瀬は無表情の中にも少し申し訳なさを滲ませた。「今すぐ地上に出してあげることはさすがに難しいわ。どこで世話になつていたかは知らないけど、連絡もたぶん無理。悪いわね」

「いや、ここまでしてくれるだけでも十分だよ」

それになんとなく予測ついてんだるーな。オレが世話になつてた場所。

いつか水瀬には、全部話そう。信じてくれなくとも構わないつて思える。紅があつさり信じてくれたせいかな。

「とりあえず、貴方の家に向かうわよ。道、覚えてね

結論から言おつ。道を覚えるのは、無理でした。

「で、ここが貴方の家になる場所。覚えた?」

「…………」

「……まなんとなく予想はついてたけど」

「面田ない。」

水瀬は持つっていた鞄から時計のような物を取り出した。

「これは簡易ナビ。大通りから、ここまでの道を登録したわ。ほんとは子供のための物なんだけど…………」

水瀬が時計型ナビに付いているボタンを押すと、空中に青白く透き通った矢印が浮かび上がる。……なんか情けない。迷子防止装置つてどこか?

「お手数お掛けシマス……」

「今更?」

面倒な奴ですんません。

オレが住むことになるという家は、ただで提供してもらひには申し訳ないほど立派だった。

元々地下であるために、普通のマンションのように何階もある建物を建築するのは少々無理があるらしく、ここでは横に長く繋がった建物が多いらしい。あっても地下のさらに地下、もしくは一階程度が普通だという。オレが世話になる場所も、平屋が並んだような低めの建物だった。

「家具とか全部揃つてるから、好きに使って。分かってると思つけど、鍵はPカードね。それからある程度の電子マネーがPカードに振り込んであるから、それも好きにして。1ヶ月不自由しないくらいは入つてる」

「ええ！？な、何から何まですいません。絶対働いて返すから  
別に期待しないわ。まあバイト程度はしないと、1ヶ月後が厳  
しいかもね」

「お、おう。がんばる」

「ただ『外』に出れない分バイトも限られてくるわね。あとでこく  
つか紹介してあげる」

「了解。さんきゅ」

「どういたしまして。今旦はゆっくり寝たらいいわ。お腹は空いて  
る？」

「いや……なんかもう色々ありすぎて空腹も過ぎ去ったよ」

「そう。じゃあ明日は美味しいものでも食べに行きましょう。おや  
すみ」

「おひ、おやすみ」

誰もいなくなつた部屋でベッドに寝転び、暫しそんやつとくる。  
ダメだ、全く頭が働いてない。

思いの外身体は疲労を訴えていたらしい。

オレの意識はいつの間にかフューリー・アウトしていた。

トタパタと軽い足音が聞こえる。そして人の声。  
なんだ……？騒がしい。

「おひにこちやーん……」

「ぐほあつ……！」

とてつもない衝撃が襲ってきた。どうやらナナがダイブしてきた

らしき。唯一の救いはナナが軽かつたことだな。しかし軽いはずな  
のにこの衝撃つてどうよ。どんな勢いで飛び込んできた。

「ナナ……どうやって入ったんだ？」

オートロックだったはずだが。

「陸ちゃんが開けてくれたー！」

「うわ、鍵の意味ねえー。

「……おはよう」

「おは、おはよう陸」

相変わらず淡々と、だけどしつかり挨拶してくれるいい子な陸の  
頭を一撫でした。

「じつはつん、じつはつんー！」

「……朝ご飯、食べに行くつて。お姉ちゃんが

「ああ、水瀬も来てんの？」

「お姉ちゃんは、まだ」

「来たわよ」

陸の言葉に被せるよつて言つて、水瀬が寝室のドアから顔を覗か  
せた。

「えーっと、一応聞くけど、鍵は」

「帳のシステム管理に携わってるんだから、鍵くらい簡単に開けれ  
るわ」

「だから、鍵の意味ないよね？」

## 不確定な日曜日

俺がこの世界に来てから、今日で一週間になる。

その間にオレがしたことといえば。水瀬に帳を案内してもらひ。ナナと陸と遊ぶ。タケに罵られる。相変わらずのノーセキュリティな家に、代わり映えのしないメンバー（水瀬、ナナ、陸）の侵入を許す。

この間、能力が開花した気配は全く無い。よかつた、厄介な能力発動しなくて。オレはできる限り平和に過ごし、自分の世界に帰るんだ！全く手掛かりは無いけど。

「お姉ちゃん！もうすぐ『リトルフット』が来るね！」

可愛らしい侵入者の一人は、口の周りをクリームで汚しながら、目をキラキラさせ言った。ちなみにこのケーキは、一週間の間にオレのお気に入りとなつた店の物である。

「ああ、もうそんな時期ね」

「……リトルフット？」

陸もこくりこくりと相槌を打つているとこりを見ると、状況が把握できていないのはオレだけのようだった。

「毎年冬になると来る旅一座。サーラスともまた違うんだけど……街の中の建物を使って、野外でパフォーマンスするの。ミコージカルとサーラスが混ざつたような、人気の見世物よ」  
冬になると来るつて……白鳥じやあるまいし。

「なんでわざわざ冬に？」

「日本は今こんな状況だから。厳しい冬にも負けないようこつて」「へえ」

ナナがちらりとオレを見る。

「どうした？」

「えと……お兄ちゃんと一緒に行きたいなあ……」

「あー……それはどうかな……」

まだ帳に来て一週間しか経っていない。といつことは、外出許可が出ない可能性が高い。ただでさえ水瀬が無理を押して、帳内は自由に行動できるようにしてもらってるし。

ナナが落ち込んだのを見て、水瀬が言った。  
「確かにリトルフットが来るのは口羅口よね？」

「うん」

「じゃあ、ミサに行くつてことにしたらどうかしら。それならその日の外出の言い訳にはなるわ」

「ミサ？」

「ええ。この国はわりとキリスト教の人間が多いから。服役中の人に間がミサに行くのを許された例もあるくらい」  
「じつではキリスト教が主流なのか。だったら尚更、鎮国は国民の反感を買うだろ？」

「一週間も地下に籠もつてたんだから、そろそろ日の光も浴びた方がいいわ」

確かに太陽が恋しくなつてきた頃だ。

外に出れるかもしないといつことで、オレは久々に気分が晴れてきた。しかしまあやつと外に出れる程度。結局帰る方法は一日くらいいじや見つからぬんだろ？けど。

「わあ！ 楽しみだね、陸ちゃん！」

「うん」

はしゃぐナナに同意した陸が、手を握られてふんふんと振り回される。相変わらずナナはパワフルだ。

「まだ保証はできないけど、たぶん大丈夫だと思つわ。今日許可を取つてみるから、少し待つてて」

「おう、了解」

なんだかんだで、この世界に来てから初めて娯楽に触れることができる。

明日どうなるかも分からぬ身ながらも、日曜日が楽しみになつた。

「 で、お前も行くんだ」

「俺は監視役だ。まだお前を信用したわけじゃないからな」

来たる日曜日。水瀬が決めた集合場所には、オレを毛嫌いしていはるはずのタケの姿もあつた。

「……素直に水瀬が心配だつて言えばいいのに」

「違う！」

「やだもつ照れちゃつて~」

最初の頃は一々タケの言動に力チンと來ていたが、慣れてくればツンケンした態度も可愛く見えてくるから不思議だ。反抗期の子供を見てる、みたいな？オレが散々水瀬のことだからかつても、未だにムキになつて反論してくるし。

思わずほくそ笑んだオレを見咎めて、タケが蹴りをかましてきた。

「いった！軍人が一般人に攻撃するつてどうなの！？」

「うるせえ、燃やすぞ」

「最低発言！実力の違い過ぎる相手への攻撃はただのイジメだよ。イジメ、かつこ悪い」

「お前情けなくないのか……」

いや、だつてオレ弱いし。自分の実力を知ることが最大の防御だし。

「……もういいかしら」

オレ達の攻防を黙つて見ていた水瀬が口を開いた。ナナと陸は物珍しそうにタケをじーっと見ている。

「タケ兄ちゃん、最近よく怒ってるね。前は怒ることなんてなかつたのに」

ナヌ！？出会いでからほほこうだぞ、こいつは。

「……前より、そつちの方がいい」

ええ！？ 考え直せ陸！

「……前は無駄に温厚だったものね。ことなれ主義つて言つか……誰かと喧嘩することなんて無かつたんじやない？私も、今の方がいいと思うわ。友達がてきて良かつたわね」

「友達じゃない！」

ぎや、見事にハモッてしまつた。

オレ達は嫌そうに顔を見合わせる。

「お兄ちゃん達、なかよしーーー！」

無邪気に笑うナナを見ていたら、どつと疲れが押し寄せてきた。

「……とにかく行くぞ。時間が無くなる」

話を逸らしたかったのか、埒が開かないと思つたのか、タケはオレ達を促した。

この日、帳を崩壊へと導く人物との出会いが待ち構えていることなど、この時のオレはまだ知るよしもなかつた。

日曜日が、始まる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0607y/>

---

コネクト。

2011年12月17日19時49分発行